




論文審査及び最終試験結果報告書

課 程 博 士	地域社会研究科 地域社会専攻 地域文化研究講座		
学 籍 番 号	19GR106	氏 名	外崎 純恵
審 査 委 員 <small>(自署又は記名押印)</small>	主 査	今田 匡彦	
	副 査	杉山 祐子	
	副 査	山田 厳子	
(論文題目) インクルーシブ教育システムにおけるサウンド・エデュケーションの汎用性の検討ー聴覚障害児に対する潜在能力アプローチー			
(論文審査の要旨) 本論文では、聴覚障害児を対象に人間が本来備えている聞く能力を活かした実践を通して、子どもたちの音楽に対する関わり方、更に日常生活における音との関わり方の変容を、参与観察によるエスノグラフィーを方法論として分析した。聴覚障害児は、言語の聞き取りと発話に困難を抱えるため、手話を用いるが、教師を含めた所謂聴者は、国語とは異なる言語である手話を禁止し、発音・発話のための訓練を聴覚障害児に行ってきた、と外崎は分析する。その上で外崎は、現在の日本の聾学校での音楽教育は、過去に於ける訓練的な内容は見られなくなったが、未だに「聴覚障害＝聞こえない」という前提の下に授業が行われ、補聴器や人工内耳の装用により聴覚障害者が聴力を有するにも拘わらず、彼らの聞く機会を設ける授業実践が少ないと指摘する。この問題を解決するために外崎は、カナダの作曲家 R.M. シェーファーが提唱したサウンドスケープ思想、及びサウンドスケープ思想を基盤として考案されたサウンド・エデュケーションによる 7 つの実践を聴覚に障害を持つ子どもたちに実施し、ビデオカメラ撮影による参与観察、及び子どもたちへの精緻なインタビュー調査を行い、この実践の有効性を示した。 その結果、子どもたちは、個々人によって聞こえ方が異なること、動作による音の変化、臭覚や触覚など他の感覚を総動員して音を聞いていること、授業内での経験を日常生活に応用させていること等の重要な findings が確認された。 以上を踏まえ外崎は、サウンド・エデュケーションを通して聴覚に障害を持つ子どもたちがさまざまな環境音を聞く能力を持ち、自らの創作活動に活かせること、聞こえないという前提は教師側からの眼差しに過ぎないことを論文の中で実証した。外崎は更に、サウンド・エデュケーションの実践が、生徒教師双方の音に対する認識変革につながることを明らかにし、そうした認識の変革自体が聴覚に障害を持つ子どもたちのインクルーシブ教育を進める土台と成りうることを示した。 論文審査に当たっては、十分な先行研究により論文の研究背景、文脈が示されているか、研究背景から明確な research questions が示されているか、research questions に応えるための適切な方法論が取られているか、方法論に沿った適切な手順による分析、検討が行われているか、research questions に対応する結論は導き出されているか、について確認した。			
(最終試験結果の要旨) 最終試験実施日：令和5年2月4日 今田、杉山、山田の3名で口頭試問を行った。審査委員から文献調査による研究背景の設定、目的、research questions、エスノグラフィーを研究方法論とする聴覚障害児のサウンド・エデュケーションによる授業実践の分析等が高く評価された。同時に審査委員からは、観察記録をより精緻に仕上げることで更に洗練された博士論文となることが指摘された。以上を踏まえ、本論文は、聴覚障害児が直面する現在の音楽教育の諸問題を明確にした上で、その問題を解決するための教育プログラムを提唱した労作であり、主査、副査全員一致で博士号授与に相応しい内容であるとの結論に至った。審査結果：合格			